



Title	痴呆性老人の行動特性に応じる生活空間条件の建築計画学的研究
Author(s)	足立, 啓
Citation	大阪大学, 1993, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3067947
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 ^あ足 ^{だち}立 ^{けい}啓

博士の専攻分野の名称 博 士 (工 学)

学 位 記 番 号 第 1 0 8 0 8 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 5 年 4 月 28 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 名 痴呆性老人の行動特性に応じる生活空間条件の建築計画学的研究

論 文 審 査 委 員 (主査)
教 授 紙野 桂人

教 授 東 孝光 教 授 舟橋 國男 教 授 檜崎 正也

論 文 内 容 の 要 旨

高齢化社会の進展に伴い、近年、痴呆性老人を取り巻く諸問題が、社会的に注目されつつある。痴呆性老人には、一般の健常老人と異なる行動特性がみられるために、日常生活の自立が困難になったり、介助が必要とされる場合が多く、それらの行動特性に対応した建築計画や生活空間条件の整備が必要とされている。

本研究では、痴呆性老人の行動特性を把握し、それに対応した生活空間条件のあり方を明らかにしようとしている。まず、第一部（第2章～第5章）では、痴呆性老人の空間における探索行動特性に注目して、経路探索行動と視覚情報探索行動の実験的研究を行い、これらの諸特性を明らかにするとともに、残存機能による自立性を維持する空間条件を検討している。次に、第二部（第6章～第8章）では、在宅および老人施設における痴呆性老人の行動特性と生活空間条件との対応関係について、実証的に把握し、生活の質を向上させる建築計画上の知見を得ている。

本研究は9章からなる。

第1章は序論であり、本研究の背景、目的、痴呆の概念、意義、方法を論じ、本研究と既往研究の関係を整理している。

第2章では、建物内で経路探索歩行実験を行い、建築空間条件と歩行行動との関係、および目的地への到達状況を痴呆程度別に検討している。

第3章では、視空間における痴呆性老人の探索行動特性を検討するために、アイカメラ法による実験を行い、基本的な静止図形と移動図形に対する注視傾向について、健常者および精神薄弱者と比較分析している。

第4章では、前章に引き続き、歩行時の経路探索を表象化した動的な誘導情報を提示して、痴呆性老人が注視を生じやすい誘導情報について検討している。

第5章では、前章の発展として、アイカメラを装着した痴呆性老人が、実際に屋内空間で目的地に探索歩行し、経路途中の誘導情報への注視傾向を検討している。

第6章では、痴呆性老人の住宅実態調査、在宅介護者への面接アンケート調査を行い、歩行自立度と問題行動との関係、日常生活行動と住宅空間条件との関係などについての検討を行っている。

第7章では、全国の老人ホーム33施設での実地調査ならびに管理・介護責任者への面接アンケート調査を行い、痴呆性老人の問題行動特性と建築・設備の対応状況についての実態を分析している。

第8章では、老人ホームにおいて、老人の日常生活行動に関する24時間の定点観察調査、痴呆性老人の昼間の行動追跡観察の事例調査、ならびに夜間の共用便所の使われ方調査を行い、日常生活行動と施設空間条件との関連を検討している。

第9章は結論であり、本研究の要約を行った上で、痴呆性老人の行動特性に応じた建築計画条件のあり方を整理している。

論文審査の結果の要旨

本研究は、高齢化社会において重要性を増すとみられる痴呆性老人の住生活空間条件をより深く把握するため、その経路探索行動ならびに問題行動実態を追跡して行動特性を明らかにし、その知見に基づいて空間計画要件を指摘したもので、その成果は次のとおりである。

- (1) 既往の痴呆性老人研究を特に行動・環境系分野において検索し、痴呆概念を整理するとともに研究の背景を明らかにしている。
- (2) 屋内の経路探索歩行行動について目標地への直線歩行実験、自室と便所への歩行実験、上下方向移動あるいは分岐経路歩行実験を行い、経路認識の徘徊的行動実態、サイン無視の直線的歩行傾向等の基礎的行動モデルを得ている。
- (3) 経路探索の基礎行動となる視覚情報への対応について、アイカメラを使用した実験的研究を、痴呆性老人、精神薄弱者、健常者の3グループを被験者として実施し、比較データを得ている。その結果、まず図形特質に対する視覚反応において、痴呆性老人が一点注視、画像中心部注視、狭域注視を、また点滅図形における黄・赤反応を特性として示すことを明らかにしている。次に移動情報に対する視覚反応においては、速度対応の劣性、中央部発現への固着傾向、重度痴呆性老人における周辺部拡散傾向等を明らかにしている。さらに実際の屋内空間行動において、痴呆性老人の誘導情報に対する反応の微弱性（関心の離散傾向）、低位置情報への反応傾向、移動矢印の誘導効果の高さ等を明らかにしている。
- (4) 一般住宅、長期居住施設（老人ホーム、病院など）について生活実態調査、定点観察調査、行動追跡調査、介護者面接調査等を複合的に実施している。その結果、問題行動として外出意図、徘徊行動ならびに失見当識に基づく失禁行動に関する空間対応の重要性と、それら問題行動を誘発するトリガーとなる可能性を示唆する一定の空間条件を得ている。また、施設における一般老人と痴呆性老人の生活分離（5類型）が、経験的に処遇対応手法と複合した仕組みをもって行われている実態、ならびにそれがもたらす問題行動回避への効果について一定の知見を得ている。
- (5) 以上の結果に基づいて、問題行動に対応するための処遇目標と建築計画上の課題について整理し、その計画的処置の組織的メニューを示している。

以上のように本論文は、痴呆性老人の住生活空間条件の把握とその計画対応について重要な知見を導いたものであり、建築計画学に寄与するところが大い。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。